

第二〇番

逃げろ、逃げろ、友よ、ぼくは致命傷を受けた、逃げるのだ。

ほら、あそこの、あの少年だ、あの子は人殺しだぞ、

彼は、残忍な矢玉で不法な獲物を手に入れるまで、

暗い藪の中に、盗っ人みたいに隠れていた。

暴虐者のことだ、見つけた所が格好の場所、

人目につかずに狙いをつけるに絶好に位置、

あの神々しい眼を包む美しく黒い瞳、

彼はそこに矢玉をもって潜んでいた。

ぼくは哀れな通行人、今そばを通りかかり、

その場所の景色が気に入り、足を留めた、

黒い色に隠れてその悪しき客が潜んでいるのに。

だが、たちまち、稲妻のような光が動くのが見えた。

そして彼の投げ矢のきらめきが眼に入った。

だが、逃れるいとまもなく、ぼくの心臓は射貫かれてしまった。

*愛神（キュービッド）の矢が当たり、アストロフィルが恋に陥った瞬間を、大胆な口語的表現で描いている。

四暗い藪の中に七番のソネットで言及されており、またこのソネットの六行目でも説明されているように、ステラは黒い眼をしていた。キュービッドはその黒い瞳の中に、矢玉を構えて潜んでいたという奇想。

第一九番

ぼくの破滅を見ながら、それを喜んで受け容れるというのは、

ぼくの心の糸がキュービッドの弓にどんな張られ方をしているため

か。

ぼくは、最も得意になっているときに、最も恥辱を感じ、
喜んで走るのが、走りながら、後悔をする。

ぼくの最上の知性は、いつもそれ自身の不名誉を作り出し、

ぼくのインクすら直ぐにステラの名前へと向って行くのに、

ぼくの言葉は、ペンがそれを組み立てているときでも、
自分たちは無駄に使われているのだと、自らに忠告する。

なぜなら、彼女は全てのものに優ってはいるが、それが一体
ぼくにとって何だというのか。いわば、空を見上げながら

溝に落ちたという人間と同じ生き方をしているぼくにとって。

ああ、ぼくの心の支えがほしい。ぼくの心は、まだ成長の途上にあるが、
生来の素質としては、最良の実を結べなくもないのだから。

「学究の君よ」と愛神が言う、「君の知性をこちらに向けよ」と。

*前の一八番の結末で示された自己破滅の主題を引き
継ぎ、その矛盾した在り方を分析する。

一〇 空を見上げながら溝に落ちたという人間 ギリシ
ヤの哲学者タレスへの言及。

第一八番

理性による会計監査を受けるとき、

何と厳しい譴責をこうむり、面目を失うことか。

そして、正しく勘定すると、天が貸し与えてくれた

財産の全てについて、おのれが破産者であることを知る。

生得の権利によって自然から借りたものも、

その貸借料でさえきちんと支払うことができない。

もつと悪いことに、おのれの財産を見事に浪費した

という以外に、立派な言い訳をすることができないのだ。

多くの青春は浪費され、多くの学問はつまらぬ考えを生み、

多くの知性は、いろいろな欲情の弁護にこれ努め、

その報いは、空しい苛立ち、それで自らを損なうだけ。

ぼくは知っている、多くの人生は自己破滅に向っていることを、

それは知っている、だがそれでも、何が悲しいかといって、

ステラのためにもう失うものがないことほど悲しいことはない。

*恋（それも人妻への）にうつつをぬかず結果の自己破滅を、浪費による破産のイメージで表現する。しかし、アストロフィルの真の悲しみはそこにあるのではない。

九つまらぬ考え (twos) 自分の詩文を暗示している。

第一七番

キユーピッドは近ごろ彼の母君の機嫌をそこねた。

軍神^{マルス}の彼女を愛する心がゆるんできたのに、

息子が矢を放って軍神の心をちくりと咎め、十分に反省させ、最初の愛の状態に縊りを戻すようにさせなかったからだ。

少年は、軍神の憎しみを買うのを恐れて、それを拒んだ。

軍神が、俺を怒らせると、鞭打ちにするぞと脅したからだ。

母親ヴィーナスは、苛立って、息子を膝から押しつけ、

弓を折り、矢を折った。息子は座って泣いていた。

すると、彼の祖母、自然の女神が、それを憐れみ、

ステラの眉毛からもっと上等な二張りの弓を、

そして彼女の眼の中で無数の矢を作ってくれた。

彼は、どんなに喜んで跳ねたことか、どんなに声をあげたことか。

そして、早速、遊びを覚え始めた男の子のように、

いたずらをはじめた。そして、ぼくが彼の通り道にいたというわけだ。

*ヴィーナスと軍神マルスとの神話が、子供のキユーピッドを中心にし、自然の女神を祖母として加え、家庭的な物語につくり直される。そして、アストロフィルの恋は、その家庭的事情のとはつちりをうけた偶然事だと面白く歌われている。

一〇ステラの眉毛から……眉毛 (brow) は弓形をしているので、それで弓 (bow) を作るというのは、当時の詩文では常套であった。

第一六番

ぼくは生まれつき惚れやすい性質なので、

美人たち——純度何カラットという美人たち——を見ると、

ぼくの沸き立つ心は、その方になびいて行つた。

愛神よ、ぼくの胸はお前で満ち溢れていると思つた。

しかし、他の人々が「それゆえにわが魂はやせ細る」と言つた、

あの絶え間のない恋の炎をおのれの中に見出せなかつたので、

恋の苦しみとはどんなものかを、おのれの恋の経験で判断し、

その赤ん坊たちは、何か針ほどの傷で悲鳴をあげているのだと思つた。

だが、このようにこの若いライオンと戯れている間に、

ぼくの眼は——呪われたと言おうか、祝福されたと言おうか——

ステラを見た。名を明かしたからには、それ以上言う必要があるうか。

彼女の眼の中に、ぼくは新しい教訓を読み取つた。

今やぼくは愛を正しく学び知つた。それも、ちょうど

毒を飲まされて毒の何たるかを知る人のように、学んだのだ。

九ライオンの子供 ギリシアの寓話の中に出てくるライオン。ある羊飼いが子供のベットとしてライオンの子を飼うが、大きくなると彼の羊を全部殺してしまう。ヘレンがトロイに及ぼした害悪の譬えとして、アイスキュロスがその『アガメムノン』の中で引用している。

第一五番

年を経た靈地パルナツソスの山麓から湧き出て、

さらさらと流れるあらゆる泉を探し求め、

その辺りに生える、おそらく芳しくはあるまい

あらゆる花の精を絞り、それを自らの詩の中に入れる君よ、

自らの詩文の中に辞書的方法を持ち込み、

がたがたと騒がしい音を響かせる君よ、

また、逝いて久しいペトラルカの哀れな嘆きを、

こと新しく溜め息をつき、移植の詩才で歌う君よ、

君たちのやり方は間違っている。遠くから援助を求めるのは、

生得の感性の欠如を暴露するようなもの。

そして、盗品は、結局、明るみが出るに決まっている。

しかしもし、君の愛と技能のために、君の名を

はちきれんばかりの「名声」の乳房で育てようと思うなら、

ステラを見て、それから書き始めるがよい。

*すでに一番、三番、六番で展開した主題を引き継いで、流行の詩作法を機械的に模倣する詩人たちについての批判。

一 パルナツソス (Parnassus) ギリシアの中央部にある山。古来、アポロとミュージアがこもる靈山として信じられていた。詩歌と文芸の象徴。

五 辞書的方法 頭韻を多用する方法。シドニーはそれを真似し「がたがたと騒がしい音を響かせる」(into your rhymes, running in rattling rows) という言葉で皮肉っている。

第一四番

ああ、友よ、ぼくの苦しみはこれでも足りぬというのか、

愛神がその箠むちの矢をぼくに射かけて使い果たし、

ぼくの胸は、最初に天の火を盗んできた者よりも、

なお激しく擱おまれ、引き裂かれていたというのに。

それなのに、君は苦味薬ルビ一杯の言葉で論争をしかけ、

ぼくを更に苦しめずにはおかぬとばかりに言う——情欲のため、

ぼくの上品な魂も、いろいろ罪深い思いにとらわれ、

その泥沼にはまり込み、ついには破滅を迎えるのだと。

もし、真実の言葉と、誠実な行いに支えられ、

知性は欠くることなく、不名誉の他は何ものも恐れない、

そのような品性を培ってくれるもの、それが罪ならば、

もし、節操固い心の中に、あらゆる浮薄な不身持ちを嫌う、

そのような心を育ててくれるもの、それが罪ならば、

それなら愛は罪だ、ぼくを罪深いままに放っておくがいい。

*一人の友人が恋にうつつをぬかずアストロフィルに、その罪深い生活をやめるように忠告する。それに対するアストフィルの反論である。この友人は二一番および六九番にも現れる。

三最初に天の火を盗んできた者プロメテウスのこと。彼は天上から火を盗み人類に与えた罪として岩に繋がれ、禿鷲に肝臓を食われた。これは恋による苦しみを描くのによく用いられた。

第三番

日の神は、雷神と軍神と愛神との三神の中で、

どの神の紋章が一番美しいかを決める審判者となった。

雷神の黄金の楯には黒い鷲が描かれていて、

その鷲の爪が美少年ガニメデスを持ち上げていた。

しかし軍神は緑の紋地に黄金の槍を手に持ち、

その穂先が血のしたたる心臓を貫いていた。

それぞれ頂飾がついていた。軍神はヴィーナスの手袋を携え、

雷神は、その兜の上に、雷電を聳えさせていた。

そのときキューピッドはにっこり微笑む。彼の頂飾には

ステラの髪がついており、彼女の顔を彼の楯とし、

その銀の紋地には紅色の薔薇が飾られている。

日の神は大空のカーテンを広く押し開き、

この最後の紋章を照らして栄光を与え、厳かに宣告して誓った、

前の両人は、道ならぬ契りゆえ、紋章もつ紳士たる資格なし、と。

*雷神と軍神と愛神の三人の神がそれぞれに相応しい紋章をもち、そのどれが一番美しいかを、日の神が審判するという奇想に基づくソネット。

三・四 雷神の……持ち上げていた 雷神は美しい牧童ガニメデス (Ganymede) に同性愛的感情を抱き、鷲の姿になって少年をオリンパスに連れていき、自分の酌取りとした。

七 軍神は……手袋をもち 軍神とヴィーナスとの不倫の恋は、日の神によってヴィーナスの夫鍛冶の神に暴露された。この鍛冶の神は巧みに作った網で二人を捕らえた。

一 銀の紋地には紅色の薔薇 ステラの顔の描写であるとともに、銀の紋地に三つの赤い円盤をあしらったリッチ家の紋章にもかけていると思われる。ちなみに、シドニーの紋章は「金の紋地に青のやじり」であった。五六番にその言及がある。

第二二番

キユーピッドよ、お前はステラの眼の中で輝き、

彼女の髪はお前の網わなで、そこから誰も逃れられない。

彼女の唇がふくよかなのは、お前がそこに充滿しているからで、彼女の甘く香しい息は、お前の炎を頻繁に燃え上がらせる。

彼女の胸には、お前のパンがゆが甘味豊かに横たわり、

彼女が優雅なので、お前の悪事も上品になる。

彼女が語れば、どんな言葉も、お前を称える説法になる。

彼女のきれいな声は、お前の名声を天まで運び上げる。

お前はステラを自分のものだと考える、ちやうど、

率いる味方の軍勢が善戦し敵陣を突破したので、

「今日の勝利はわが軍のもので」と叫ぶように。

だが、それは思い違いだ。彼女の胸は難攻不落の砦、

知性で防御を固め、内には侮蔑を蓄えている。

それを勝ち取るには、あらゆる技術と苦痛が要るのだ。

二網わな 原文では“*Delicias*”。実妹メアリの嫁ぎ先ペンブルック伯爵邸が存するウィルトシャーでその昔に用いられたひばりを捕らえるためのわな。明るく輝く幾つかの小さな鏡をおとりしておびきよせ、網で捕らえるしくみ。鏡はステラの眼を、網は彼女の髪をさしている。

第一一番

おお、愛神キュービッドよ、お前はいかにも子供っぽく

この上もなく生真面目な手順を踏むことか。

天がその最上のもをお前にお示しになるときでも、

その最上のもの中でも最上のもを、お前は置き去りにする。

子供が、なにか美しい本を見つけると、

金ぬりのページや、色刷りのペラム皮紙をもてあそぶか、

あるいは、せいぜい何かきれいな絵に心を留める、

しかし、著者の知性の賜物には全く気をとめない、

そのように、自然の飾り筆筒の中にステラを見つけたとき、

お前は、すぐに彼女の眼の中の赤ん坊に目をとめ、

彼女の頬のえくぼの中に落とし穴を仕掛けたり、

また彼女の胸で「いないいないばあ」をしたり、隠れんぼをしたり、

体の外側の各所でたわむれ、また光り輝いてみせる。

しかし、愚かというか、彼女の心の中に入ろうとはしない。

*次の一二番とともに、ステラと愛神キュービッドとの関係を描いている。キュービッドはステラの身体の中にしる部分をもつものにするが、彼女の心の中には入ろうとはしないし、また入ることはできない。ステラの節操が堅固であることを暗示している。

一〇 赤ん坊 ステラの二つの瞳に映ったキュービッドの姿。言うまでもなく、キュービッドは裸の翼をもつた男の子 (a naked, winged boy) である。

一一 落とし穴 鳥を捕らえるためのわな。

第一〇番

理性よ、お前はまことに充分な報いを受けた。いつも

お前は、ほくの中の感覚や愛に難癖をつけてきたからだ。

ほくはむしろ願っていたのだ、お前がミューズの丘に登ることを、

自然のえり抜きの木の実に手を伸ばすことを、

天界の運行、また天界の内側に目を向けることを。

お前は どうして我々の棘の多い土を耕そうと骨を折るのか。

感覚と感覚の対象であるものなど放っておいて、

思考の働きにこそかわり、愛のことは意志に任せたらよい。

なにお前は どうしても愛と感覚とを相手に戦い、

知性の剣で非難の傷を負わせようとした。

だが ついに、打ち下ろす打撃がお前の老練な剣さばきを挫いたのだ。

愛と感覚がステラの光線を武器にしてお前に打ちかかるやいなや、

理性よ、お前は ひざまづき、直ちに結構な理由を述べ立て、

彼女を愛するには結構な理由があることを証明したのだから。

* 理性と愛との対立する論争は、中世からルネサンスにかけての恋愛詩でしばしばとり扱われた主題。ここでは、愛と感覚を打ち負かそうとする理性がステラの光に合うや屈服し、かえって愛を弁護するに至るいきさつを語る。

三 ミューズの丘 ギリシア中南部にあるヘリコン

(Helicon) の山。古代ギリシア人はそこにアポロとミューズが住んでいると考えていた。

四 自然のえりぬき木 知識の木のことであろう。「ミューズの丘」に登ることが詩歌を求めることとすれば、この知識の木の実に手を伸ばすことはすなわち学問の道を求めることを意味すると思われる。

八 愛のことは意志に任せたらよい 愛には、理性的な愛と、感覚的・肉体的・情欲的な愛が存在するが、アストロフィルは後者を支配する「意志」、「情欲」に愛の支配を委ねるように、「理性」自体に懇願する。

第九番

美徳の女王の宮廷——ある者はそれをステラの顔と呼ぶ——は、

自然の女神が生み出す最高の調度品を備えている。

正面は純白の雪花石膏で造られており、

その堂々たる建物の屋根は金である。

女王が時々お出ましになる扉は赤い斑岩で、

真珠の錠がそれをしっかりと固めている。

その豪華な玄関——それは「頬」という名を負う——は

赤と白の混じった大理石を組み合わせている。

さて、この天上よりの客人が世界を眺める窓——眺めても

それが放つ光がもつ「最高」という名を引き渡せと要求しうるもの、

そのようなのは何一つ目に留まらぬのであるが——

その窓は、物に触れずとも物を動かす黒玉からできており、

キューピッド自身が美の鉾山から掘り出してきたもの、

窓は黒玉造り、そして、あわればくはそれに惹かれる藁のくず。

*ステラの美しい顔立ちを、美徳の女王が住む豪華な宮殿に譬えている。すなわち、その白い顔は純白な雪花石膏の正面に、その金髪は黄金でできた屋根に、その唇は赤い斑岩の扉に、その歯は真珠の錠前に譬えられる。

一二 黒玉 原文では、soudy、ステラの黒い眼を指している。シドニーはそれを亜炭 (bitume) の一種である黒玉 (jet) に譬えていると思われる。これは摩擦すると静電気を帯び、物を引き付ける。

第八番

愛神は、ギリシア生まれだが、近頃彼の生まれ故郷を逃げ出した。

トルコ人の硬化した心は、彼の細くとがった矢で貫くには

相応しいのではないと、いやというほど知らされたからだ。

そして我々の穏やかな平和が気に入り、ここで旅の羽根を休めた。

しかしこの北国の天候は余りにも寒く彼を抱き迎え、

冷たい抱擁に慣れない彼は、一所懸命に探し回った、

どこかもつと容易に暖かく彼の技を使えるところはないかと。

ついに彼はステラの喜びに溢れる顔に止まった。

だが、彼女の美しい肌、光り輝く眼が、雪の上の朝日のように、

震える少年をだました。彼はこんなに清らかな光からは、

当然生き返るような暖かさが出るにちがいないと思つたのだ。

しかし、彼女がこの上もなく美しいが、この上もなく冷たいのを知り、

彼はそこを飛び立ち、ぼくの塞がった胸に飛び込んだ。だが不覚に

も、

松明を置いている間に、翼を焼き焦がし、飛び去ることができぬ始

末。

*愛神キューピッドは逃亡者である。彼の住まいは婦人の眼または胸の中である。彼は松明で翼を焼いたため、恋人の胸に留まることになった。シドニーはこれから三つの伝説を一つに結びつけ、当時の歴史的事実からませて、新しい物語を作り出している。

一その生まれ故郷 キューピッドの母ヴィーナスの里はキプロスであるが、キプロスは一五七三年トルコ人によって侵略された。

四我々の穏やかな平和 エリザベス一世の最初の二〇年余の治世は、外国との戦争を避ける政策によって、平和が続いた。

第七番

自然の女神がその最高の傑作、ステラの眼を造ったとき、あれほど明るく輝く光をどうして黒い色で包んだのか。

女神は、賢明な画家のように、光り輝く黒色を用い、明と暗の混ざった、最高に優雅な光沢を造ろうとしたのか。

あるいはまた、女神は、我々の視力を最もよく集中させ、強めるために、対象の中にあのような地味な色を案出したのか。あの燦然と輝く光は、それを覆うヴェールがないと、

太陽のように、眼を喜ばすというより、眩くらますだろうから。それとも、女神はその不思議な力を示そうとしたのか。

黒は美と反対の色だが、その黒色を用いても、全ての美を流露させることができるという力を。

それもそうだが、こうも言えよう。女神は、ステラの眼の中に

いつまでも愛神を住まわせておくつもりで、彼に喪服を与え、彼女のために血を流す恋人たちの死に誉れを与えさせたのだと。

二 自然の女神がどうして彼女の眼を黒く作ったかを尋ねることがこの詩の内容となっている。ステラの実在のモデルとされる初代エセックス伯の長女、ペネロピ・デヴァルー (Penelope Deveraux) は金髪で黒い眼をしていた。シドニーの代表作『アーケイディア』のヒロインの一人、フィロクレア姫も金髪で黒い瞳の可憐な乙女として描かれる。中世以来、西欧における美人の第一の基準は金髪・碧眼、という伝統に反して、シドニーが黒い瞳になぜ魅かれたのか不明であるが、ひよつとすると、異国的な黒い瞳に新しい美の基準を託そうとしたのかもしれない。シェイクスピアの『ソネット集』に見られるように、黒髪、黒い眼の婦人 (dark eyed beauties) を賛美するもう一つの伝統もあった。

第六番

恋人たちのある者、詩神をもてなすときに語るのは、
不安が生んだ希望、何か訳の分からぬ欲望、

地獄の苦しみを注ぎこむ天来の光の力、

生ける死、愛しい傷、晴天の嵐、凍りつかせる炎。

またある者、その歌に装わせるのは、ジュピターとその不思議な物

語、

雄牛と白鳥で刺繍し、黄金の雨をふりかけて装飾した物語。

他のよりつまましい才人は、羊飼の笛に身をやつすが、

王者の血筋を鄙びた調べに隠しもつことしばしば。

ある者には、甘美な悲しみが甘美な文体を与える。

涙溢れてインクとなり、溜め息吐かれて言葉となる。

彼の紙は青白い絶望、苦痛が彼のペンを動かす。

ほくも感じることを語れるし、彼らと同じく感じることができる。

しかし思うのだ、震える声で「ほくはステラを愛する」と明かすとき、

ほくの心の領土の地図をくまなく示しているのであると。

*三番と同じく、当時流行していた恋愛詩の手法（矛盾語法、神話への言及、牧歌的仮装、感情の擬人化など）を列挙したのち、それらと対照的な自分の率直な飾らぬ手法の真実性を主張する。

五ジュピターとその不思議な物語 ジュピターはエウロペ、レダおよびタナエなどの女性に対し、雄牛、白鳥、黄金の雨などの姿をとって言い寄った。

第五番

眼は内なる光（理性）に仕えるために造られている。

そして、その神聖な部分が王となるべきであり、

その王が定める規則を踏み外す者は自然に対する反逆者、

自ら苦悩を求める者、これは紛れもない真実^{まこと}。

我々がキューピッドの矢と呼ぶものは、一つの偶像にすぎず、

我々自ら刻んで造ったものなのに、愚かにも、

自分の心の社に安置して崇拜し、やがて

その善き神のため教会と牧師たち飢え死にする。これもまぎれもない

真実。

真の美とは「徳」のことにほかならず、

この世の美はその影にすぎず、滅ぶべき運命^{さだめ}と

四大元素が結合して生み出したもの——これも真実。

我々はこの世では巡礼として造られたものにすぎず、

靈魂となり、我らの祖国へと帰り行くべきもの。これも真実。

全て真実。だが、ぼくはステラを愛さずにはいられぬ、これも真実。

*前の四番と同じ主題を取り扱っている。内なる光である理性に従うべきだという、伝統的な理想主義の説得を認めながら、ステラの肉体的美しさに魅せられざるを得ぬ事実を主張する。いわばバリノード（愛の取り消し）の拒否である。それに相応するように、この

連作集の最後にはバリノードがくるのではない。

八教会と牧師たち 恋する者の肉体と心。それを愛神がやつれさせるというのである。

一一 四大元素 万物を構成すると考えられた四大元素（地、水、火、風）。

一三 我らの祖国 天国のこと。

第四番

「徳」よ、お願いだ、ぼくに暫時の休息をとらせてほしい。

そなたゆえに、ぼくの欲望と分別の間に諍いがおこるのだ。

もし無益な愛欲のためにぼくの愚かな心が苦しんでいるというのなら、

ら、

そなたが好まぬものなど捨て去り、それに係わりを持たぬがよい。

そなたの王笏は年老いたカトーのごとき人の胸で用いたらよい。

そなたが座る玉座は教会や学校が最もふさわしい。

ぼくはあえて告白する——告白した罪は許してほしい——

ぼくの口は余りにもか弱く、その固い銜はまには耐えられぬと。

だがもし、そなたがどうしても、ぼくの中に残っている

わずかな理性をも自分のものにしようというのなら、

そしてその説得の効果を試してみたいというのなら、

ぼくは誓って言う、ぼくの胸にはそなたに見せたい人がいる。

その方は、現うつし身の社やしろに一体の神を納め祭っているが、

それは、「徳」よ、そなたもきつと恋するほどの真実の神なのだ。

た。

五 新発明の言葉の彩を……「言葉の彩」とは修辭的
技巧、とりわけ思想の修辭のこと。「命題」とは議論
や解決のために提示される問題のこと。アリストテレ
スの疑似命題集が中世には流行し、諸命題の処理法は
ペトラルカ主義者には、おはこの趣向であった。ここ
では、ウオトソン Thomas Watson (1557-92) のように、
詩の中に古典の論理や修辭を取り入れ奇をてらう人々
への言及。

七・八 当時流行した Euphuism: (美辭麗句を連ね
て気取った華麗な文体) の生みの親リリー John Lyly
(1554-1606) などの気取った誇飾体の浮薄な作風への
言及。このような比喻に関するシドニーの見解は『詩
の擁護』を参照。

* (徳) と (愛)、すなわち、(理性) と (欲望) と
の相克が主題。これは『アストロフィルとステラ』
全体を貫く主要なテーマである(とりわけ、五、
一〇、一四、一八、一九、二二、二五、四七番を参照)。

五カトー Marcus Cato (234-149B.C.) ローマの将軍、
政治家で「大カトー」また「監督官カトー」とも呼ば
れ、罪・過失の厳しい懲罰者として知られ、八六歳ま
で生きた。『詩の擁護』九一頁を参照。

第三番

好みにうるさい才人たちには、九人の女神を呼び求めさせたらよい。すれば、彼らの空想を、華やかに飾り立て、語ることもできよう。ピンダロスの猿真似たちには、その金ぴかの思想を

まだら模様の詩花で飾り立て、美辞麗句を着て練り歩かせたらよい。

あるいは、新発明の言葉の彩を、古い命題を添えて気高くし、彼らをいつそう堂々たる栄光で輝かせたらよい。

あるいは、インドやアフリカで育つ色々な草や獣を素材にした舶来の比喩を用いて詩の各行を華美にさせたらよからう。

ぼくはといえば、実のところ、知っている詩神はただ一人。

言葉や命題はぼくの手の届く範囲から生まれてくるし、舶来の品物はぼくの貧しい精神には高価にすぎず。

ではどうする。こうすると言おうか。ステラの顔の中にこそぼくは読みとる、愛と美の実体を。ぼくの為すことといえば、

自然が彼女の中に書き記したものを写しとるだけなのだ。

八不公平な運命、運命が一方的であり、麗人の肩の
みを持つことを嘆き悔しがる。

一〇 奴隷に生まれついたロシア人 当時のエリザベス朝の人々の間では、ロシア人は自由よりも彼らの皇帝の圧政的な支配の下で隷属状態を好むという風評が信じられていた。

*当時イングランドおよびヨーロッパ諸国で流行っていた作詩法（詩神への呼びかけ、ギリシア詩人の模倣、修辭的裝飾、婉曲語法）を列挙しながら、自分はそれらの作詩法に頼らず、ただステラの姿のみを写すだけ、という無技巧の作詩法を提唱する。

一九人の女神をよび求める *Juvor peotikus*（詩的狂熱）の古典的理論が一六世紀のヨーロッパ諸国で復活し、例えばスペンサーは『羊飼いの歌』の「一〇月の牧歌」でこのような詩的靈感の礼賛者を歌う。シドニーはこの説に懐疑的であり、『詩の擁護』の中で、「プラトンは私自身がする以上のことを詩に帰せしめている。詩とは人智をはるかに超えた神的力量を吹き込むもの。他ならないと評価している（本書九八頁）」と述べ、『アストロフィルとステラ』七四番五・六行では、「幾人かの人が詩人の狂乱について語るのを聞く。だが、それが何を意味するのか（神のみぞ知る）、私は知らない」と歌う。

三 ピンダロスの猿まねたち ロンサール Pierre Ronsard (1524-85) や他の「スバル派」(Pléiades) の詩人たちのこと。彼らはピンダロス Pindar (523? 443? BC) やその他のギリシアの叙情詩人らの詩を好んで模倣し

第二番

最初の一視でもなければ、乱れ撃ちでもなかった、

愛神がほくに生命あるかぎり血を流し続けることになる傷を与えた

のは。

皆が認めていた価値が時間の坑道をくぐって、

次第に歩を進め、ついに完全な征服をしとげたのだ。

ほくは出会って、好きになった。好きになったが、愛しはしなかった。

愛したが、直ぐには愛神が命じることを行いはしなかった。

ついに、否応なくて、愛神の命令に同意した。

だが、ひどく不公平な運命をかこちながらの同意であった。

今では、失われた自由の足跡さえも消えうせ、

奴隷に生まれついたロシア人さながら、

暴政に耐えることを美德と呼ぶ仕儀となった。

そして、今ではほくの知力の残り糟を用い、

万事異常なしと自らに得心させようとす、

感情の技術を揮い、ほくの住む牢屋を美しく彩色しながら。

一 他人の韻脚 (Others' feet) 他詩人の作詩法のこと、それは自分の詩作の道 (My way) にはなじまないこと、"feet"を「韻脚」と「足」との二義にかけて言っている。

一四「お前の心の中を見て書け」有名な言葉。あらゆる人間の機能の主座は心の中にあるのはステラの像であり、それが創意のために必要な全ての材料を与えてくれる。本詩集の二番と一五番は同じテーマの変奏であり、シェイクスピア『ソネット集』三八番も「私の詩神が題材に事欠はずなぞあるはずがない。／＼きみが生きていて、きみという美しい主題を／私の詩に注ぎ込んでくれるのだから」と同主旨を歌う。

* 主人公のアストロフィルがステラを愛するに至った次第を回想的に述べる。ペトラルカ Francesco Petrarca (1304-74) からマローロウ Christopher Marlowe (1564-1593) を経て、イギリス・ルネサンス期の恋愛詩の常套である「一目惚れ」の愛でなく、緩慢な時の過程をへた後の愛であると述べる点で、スペンサー Edmund Spenser (1529-99) の「愛というものは、一目見てすぐに燃え上がるような、それほど軽々しいものではない」「美への讃歌」二〇九・一〇行」と並んで、異色である。

一 乱れ射ち これが出鱈目で効果のないものであるのは、『尺には尺を』一幕一場二・三行の公爵が豪語する台詞「愛の矢の乱れ射ちなどで、この完全装備の胸を／射抜けるわけではないのだ」を参照。

三 坑道 (mine) 包囲攻撃で掘るトンネル。

第一番

真実、心から愛しており、その愛を詩に歌って示したい。

彼女（愛しい彼女）が、ぼくの苦しみを見て楽しみを味わい、楽しいので、読もうと思ひ、読んで知るようになり

知って憐憫をおぼえ、憐憫から好意をもつてくれたらと願ってのこと。

ぼくは、苦悩の暗い顔を化粧するのに適切な言葉を探し、

彼女の知性を楽しませようと、華麗な詩想を博搜した。

他人の書物を紐解くのもしばしば、そこから新鮮な慈雨が流れ出し、恋の炎に枯渇したぼくの頭脳を潤してくれないかと思つたのだ。

だが言葉は、創意の支えを欠いていて、びっこをひいて現われ、

自然の子である創意は、継母の学問にぶたれて逃げ去り、

他人の韻脚は、ぼくが歩む詩作の道にはふさわしからぬものと思われ
た。

このように語りたい欲望に腹膨れ、陣痛の苦しみになすすべもなく、

怠惰なペンを噛み、悔しさの余り、わが身を叩いていると、

「愚か者よ」とぼくの詩神が宣いた、「お前の心の中を見て、書く

のだ」と。

*革新的な韻律の一二音節で書かれたこの冒頭のソネットでは、(一)ステラが詩的創造の根拠であること、(二)恋愛詩の創作の方法は自然の子である創意に基づくべきであることが提唱される。本詩は、この連作集の序説的役割を果たし、批評的精神に貫かれている(Ringler pp.458-459)を参照。

八恋の炎に枯渇したぼくの頭脳 知性の受容力あるいはその活力源の湿り気が激しい愛の炎によって干上がってしまったこと。

一〇自然の子である創意 詩人の天分。より詳しく解説すると「創意」とは、思想と主題の発見であり、古代及びルネサンス期の理論家たちによって文学作品を案出するために必須とされた三過程（「創意」、「配列」、「表現」の第一段階のこと。「創意」を産むための材料は無限であるが、理論家たちは、創意の特定の話題や場所を列挙することで、「自然の子」として作者の天分に主として依存するその知的過程を組織化しようとした。最も重要な創意の場所は内在的なものであり、主題自体の資質から生まれ、それには明確な輪郭、相違、付随するもの、比較等が含まれるとされた。自然の模倣ではなく、他の著作の模倣を推奨し、これと真向から対立する創作理論も存在した。

この詩では、後者の模倣理論に従って、アストロフィは間違った順序で不適切な方法で歌い始め、主題ではなく言葉表現をまず求め、創意の正当な過程ではなく、他の詩人たちの模倣によって言葉を探そうとしている。同時代の詩人たちの恋愛詩の手法へのシンドニーの批判は、『詩の擁護』を参照。

翻訳の底本には、William A. Ringler Jr. ed. *The Poems of Sir Philip Sidney*. Oxford: At the Clarendon Press, 1962 を用い、Katherine Duncan-Jones ed. *Sir Philip Sidney: Selected Poem*. Oxford Univ. Press, 1973; Robert Kimbrough ed. *Sir Philip Sidney: Selected Prose and Poetry*. The Univ. of Wisconsin Press, 1983; Katherine Duncan-Jones ed. *Sir Philip Sidney: A Critical Edition of The Major Works*. Oxford Univ. Press, 1989 等を参照し、それらの注釈等には教えられた。

本詩集には二種類の先行訳が存在する。中田 修訳、『シドニ詩集』、東京教学社、一九七六年と、大塚定徳・他訳、『アストロフェルとステラ 付サーティン・ソネッツ』、篠崎書林、一九七九年であり、適宜参照した。なお、本訳詩は後者に加筆推敲し、いっそう詳しい注解を施したものである。

村 里 好 俊

大 塚 定 徳
(鹿 児 島 大 学 名 誉 教 授)

翻 訳 ・ 注 釈

ア ス ト ロ フ ィ ル と ス テ ラ